

# 國府祭



寒川神社の國府祭は、海の日に行われる「浜降祭」に並ぶ「二大神幸祭」の1つであり毎年、5月5日に中郡大磯町国府本郷にて斎行される祭典です。

## 「國府祭とは」

國府祭は毎年、5月5日、神奈川県中郡大磯町国府本郷において斎行される祭典です。一之宮の寒川神社を始め、二之宮川勾神社、三之宮比々多神社、四之宮前鳥神社、平塚八幡宮、総社の六所神社を加えた6社が祭場に参集し祭典が執り行われます。昭和53年、神奈川県無形民俗文化財に指定されており、古くは「端午祭」、「天下祭」とも呼ばれていました。



【古式 座問答】

國府祭は大きく分けて2つの神事から構成されています。1つは国府本郷の神揃山で行われる古式「座問答」、もう1つは神揃山の近くの大矢場で行われる「神対面・国司奉幣・神裁許」の神事です。一般的に「國府祭Ⅱ座問答」と捉えがちですが、神揃山と大矢場の2つの神事を合わせて國府祭と考えられています。

相模國はかつて東は相武、西は磯長の2つの国に分かれており、大化の改新で合併、成立したとされています。

それぞれの一之宮であった寒川神社と川勾神社の一之宮争いを儀式化したものが座問答といわれており、神事は一之宮・二之宮・三之宮が中心となって執り行われ、御神前に向けて一之宮と二之宮が交互に虎の皮を敷き進め、3度繰り返すと三之宮の宮司が「いざれ明年まで」と仲裁に入り神事が終わります。

座問答が終わると、総社である六所神社へ神事が滞りなく終わったことを伝達し、大矢場への出立を促します。六所神社の大矢場への出立と同じくし



【鷲の舞】

て、各社の神輿も大矢場へと向かいます。この時、大矢場での祭場では鷲の舞が奉納されます（舞は古来、赴任してくる国司への歓迎の舞であるといわれています）。その後、6社全ての神輿が集まると神事が執り行われます。各社宮司は六所神社の神輿前に立ち、自社の御分霊を祀った守公神を御神前へと奉る神対面の儀が執り行われます。次に大磯町長が国司に扮して各社巡拝、国司奉幣の儀・神裁許の儀が執り行われ神事が終了となります。



## 「起源」

大宝律令制定後、国内は国・郡・里の行政制度に編成され、国の行政官「国司」が中央から派遣されました。国司は行政・司法・軍事の統括、神社の維持・管理・祭祀の運営も重要な職務であったとされています。平安時代には、赴任した国司による国内神社への巡拝行事が慣例でしたが、その煩雑さから次第に制度は簡略化され、国司が赴任する国府近くに国内諸社の御霊を合わせて祀る「総社」を設けて巡拝するようになりました。

時代の流れと共に、この慣例も徐々に姿を消していきましたが、神社祭祀の中にその姿を残しています。國府祭も国司巡拝の様相を現代に色濃く残す祭典の一つといえます。



【神揃山祭】

## 「特徴」

大矢場で執り行われる「国司奉幣・神裁許」のように、総社に国内諸社を合わせ祀る形式を有した神事は、全国各地で見受けられます。しかし、古式「座問答」のような一之宮争いを儀式化した神事は他にはなく、國府祭特有の神事といえます。11世紀から12世紀にかけて国内神社に序列を定める「一宮制」が成立したといわれていますが、公的制度ではないため、明確な基準もなく選定方法についても諸説あります。

また序列が必ずしも一定ではなく、様々な理由で変化して、新たに一之宮として台頭する神社も現れ、互いの序列を巡って争いが起こったとしても不思議ではありません。國府祭は歴史的背景を随所に残しながら継承されている大切な神事であると考えられます。



【大矢場の渡御】

## 「浜降祭との関係」

天保9年（1838年）の國府祭の帰路において、馬入の渡し場（現平塚市・馬入ふれあい公園付近）で地元氏子との争いに巻き込まれ、大雨により増水した相模川に寒川神社の神輿が転落し相模湾まで流出してしまいました。搜索を依頼してから数日後、南湖の浜で地引網を曳いていた地元漁師「鈴木孫七」によって神輿は発見され、浜降祭の禊場も現在の南湖の浜へ移されたといわれています。

このように國府祭は相模國にとって最大の祭典であり、寒川神社にとっても「浜降祭」に密接に関係する重要な祭典でもあるのです。



【守公神】

## 結びに

本誌は國府祭の基礎知識として、平成30年に発刊の「相模國の神々が集う相模國府祭」の記事を再編集して製作致しました。

國府祭は六所神社を中心に6社が古来より大切にしている祭典です。國府祭が途切れることなく後世に受け継がれることを衷心より祈念致します。



【神対面の儀】



相模國一之宮  
寒川神社

（令和7年3月）